

深川あやかし屋敷奇譚

～天眼通の旦那と春の夜のまぼろし～

笹目いく子 Ikuko Sasame



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

狂い三味線じやみせん

5

人喰いつづら

109

犬神

201

狂
い
三^{じや}
味^み
線^{せん}

(一)

屋敷の庭木が綾錦のごとき衣を纏いはじめた、神無月のはじめ。

仲町への使いから戻った女中のお凜は、茶の間の光景を前に縁側に立ち尽くしていた。頬を強張らせ、わなわなとふるえているのは、ひやりとした朝の風のせいではない。感激に打ちふるえているからでも、もちろん具合が悪いからでもない。

怒っているのである。それも猛烈に。

「旦那様……またそんながらくたを預かったんですか？」

声を発するのもやつとのお凜の視線の先には、大人の足ほどの太さと長さがありそうな朽木が転がっていた。巨大な手に捻られたのかと思うほど歪み、黒ずんだ樹皮は無数の蛇が絡みついたかのような皺に覆われている。美しく整えられた茶の間にそぐわぬ、あまりにも不気味な姿だ。

「がらくただって？ 失礼な」

正体不明の枝だか幹だかの前に座り込み、樹皮をうつとり撫でていた青年が心外そうに言った。

青年はこの屋敷の主で、名を仙之助という。

「聞いて驚けよ？ これはな、世にも珍しい人面樹だ。人面樹」

「人面樹」

呻いたお凜の顔が引き攣った。だが主は黒々とした瞳を輝かせ、そうさ、と声を弾ませる。

「ここを見てみる。ほら、ここだ！ どうだ、苦悶するような人の顔があるだろう。な？ こいつがだな、睨むんだと。珍しい風情の枝だもんで、床柱にでもしようと洲崎の浜から拾ってきたそうなんだが、ある日閻魔みたいな恐ろしい目で睨みつけて、呪いの言葉を唱え出したそう。それで、悪いことがどんどん起きて止まらない。こいつはたまらん、預かってくれ、とさっきのお客が頼み込んだんだよ」

嬉々として指すあたりにはうねうねと皺が寄り、波のような複雑な模様が浮かび上がっている。それが顔とやらであるらしい。

お凜は眩暈を覚えながら障子の框を掴み、きりきりと爪を立てた。

使いに出る際、庭先で見かけた来客か。どこかの商家の旦那に見えたが、そんなもの

を持ち込んでいたとは。お凧が目を光らせていたならば、こんな小汚い朽木は突っ返したに違いないのに。屋敷を留守にした自分の迂闊が悔やまれてならぬ。

「そんなもの、まがいものに決まっているじゃありませんか！　またがらくたを押し付けられて。ただでさえお屋敷ががらくただけだというのに」

くわつと目を見開き詰め寄るお凧に、仙之助は負けじと小鼻を膨らませる。

「がらくたがらくた言うな！　皆いわく因縁付きの、呪われて崇られた恐ろしい品なんだぞ？　ほら、この恐怖に歪んだ、嘆き悲しむような顔ときたら……」

「顔なんてありやしません。気のせいです」

お凧が般若の形相で唸ると、怯えた主が謎の人面樹に抱きついた。

「人面樹だなんて、馬鹿馬鹿しい。これをお屋敷に置くだなんてとんでもありません。とりあえずお庭に放り出してください。茸でも育てるか、叩き割って薪にでもした方がまだ役に立ちます」

「なんとという極悪非道を口にするんだ。雨晒しにして本当に茸が生えたら可哀想だと思わないのか？　わあ、やめろ！　私の可愛い人面樹に何をする！」

「松茸が椎茸でも生やしてくれたら、私も可愛がつてあげます」

枝を転がして縁側から放り出そうとするお凧に、鬼、と仙之助が悲鳴を上げる。

当年十六のお凧は、すんなりとした手足のわりに大層な力持ちで、物怖じしない、しっかり者で通っている。つんとした鼻や血色のいい頬、よく表情を変える瞳にも愛嬌がある。だが、奇矯な主に振り回されて鍛えられたのか、二年あまりの奉公ですっかり貫禄がついてしまったらしい。今や、仙之助よりもよほど凄みと胆力がある……と、同じ屋敷の奉公人であるお江津と富蔵に評されているのだった。

一方、人面樹を抱き締める仙之助は当年二十六。なで肩で細身の体つきに、大ぶりな源氏香柄をちりばめた黒の袴、芝翫茶の羽織、そして膳脂に更紗文を織り込んだ帯という通好みの出で立ちが板についている。浅草田町の高級料理茶屋『柳亭』の次男坊で、名うての遊び人として名を馳せる放蕩息子であるからさもありなん。粋な細鬚といい、美しく整った鬢や髭といい、装いには一分の隙もない。品のいい顔は白く滑らかで、黒々とした大きな瞳も印象的な、黙っていれば垢抜けた美男子である。……黙っていれば。

実はこの仙之助、美女と怪異を愛することにかけては右に出る者はないという、奇妙奇天烈な性癖の持ち主なのだ。

屋敷はいわく因縁付きだとかいう得体の知れぬがらくたであふれ、世間様から「あやかし屋敷」などと揶揄される始末。数年前には、実家柳亭の店主と女将が、この次男坊に暖簾分けしてやろうとか、どこぞの本店の婿入り先を見つけてやろうとか心を砕いた

のだが、当の仙之助は冗談は由之介とばかりに目を剥いて、

「嫌ですよ、そんな氣ぶつせいなのは。こんな極楽とんぼに、商いだの婿だのが務まるわけないでしょう。どら息子に夢を見すぎですよ、おとつあんなたちときたら。いやいや、おとつあんやおつかさんや兄さんに恥をかかせたくないから言うんです。店の名前に傷がついたらどうします?」

と親孝行なんだか親不孝なんだかわからぬ台詞で論じたそうだと。

その上、

「それよりも、どこかに適当な屋敷の一つでももらえませんか。そうしたら大人しくのらりくらり暮らしますんで。その方がずっと安上がりだと思えますよ。ね?」

と臆面もなくねだって、この深川木場は島田町に屋敷まで用意してもらったという経緯がある。まさに天をも恐れぬ与太郎っぷり。柳亭のご家人の苦勞が偲ばれるというものだ。

おまけに、誰が言いはじめたのか怪異を見分ける千里眼だと噂されて、今では「天眼通の旦那」の二つ名で巷間に知られているそう。そして、その噂を聞きつけて相談事を持ち込むお客人が後を絶たぬのである。

彼らの相談事は様々だ。……けれど、ただ一つだけ似通ったことがある。

天眼通の旦那を頼って訪れるお客人们は、色々なものを屋敷に持ち込むのだ。

それはこの人面樹のようなものとは限らず、時には人であつたり猫であつたりする。相通じるのは、皆揃いも揃って、いわゆる縁付きのあやしげなものである、ということだ。

「旦那様、黒江町からお客様がお見えです。急ぎのご用事とか……一体、なんの騒ぎですか?」

お江津が縁側に現れ、正体不明の枝に組み付いて争う主従にぎよつとする。

「誰だつて? 今、見てのとおり取り込み中だ!」

畳に転がり、熊か猿のごとく木にしがみついた仙之助が声を荒らげた。

お江津は下がり気味の目尻をますます下げて嘆息すると、主の顔を覗き込む。

「二代目杵屋勘十郎様のお妹様です。天眼通の旦那様にどうしてもお目にかかりたいと。なんでも、勘十郎様のお命にかかわるお話で、ぜひお目にかきたい品がおありだそうで!」物騒な言葉に、お凜も仙之助も動きを止めた。

「……へえ。つまりそいつは、いわゆる因縁付きの品ってわけかい?」

首をもたげた仙之助は、童を思わせる無邪気な瞳を光らせ、つうつと口角を引き上げて笑った。

仙之助に應じるかのように、一陣の冷たい風が艶やかに色づく庭木をざわめかせて通

り過ぎる。潮騒しほざわのような葉擦れの音が、どういいうわけか、木々の囁きささやとも笑い声とも思われてならなかった。

「私、二代目杵屋勘十郎の妹でお春と申します。突然押しかけ、申し訳ございません」
居間で向き合った娘が、畳に両手をついて言った。

数寄を凝らした欄間や銘木の柱も美しい座敷は、長火鉢に炭が熾おどされ、ぬくぬくとあたたかい。しかし、硬い表情で座したお春は、凍風に晒さらされているかのごとく青ざめていた。

二十になるかどうかという年の頃と見えた。よほど急いでやってきたのか、白い額に汗が浮かんでいる。それでも、眼差しや所作にぱつと目を引く美しさがあつた。淡青色の地に映える朱い椿を散らした袷あはせ襟元には赤をきかせ、大胆な色合いの太縞の帯という洒落た出で立ちだ。艶やかな島田髷に差してある櫛や簪も趣味がよく、それでいてどこかきりりとした空気を纏まとっている。

そのお春の膝の前には、江戸紫の風呂敷を被せられた、細長いものが置かれていた。
「二代目杵屋勘十郎さん、存じてますよ」

娘の向かいに座した仙之助が嬉々として言う。

「いい糸を弾くお方ですよねえ。お父上の初代勘十郎さんも、杵屋宗家から別家を許された名手でいらつしやいましたね」

茶と茶菓を出して壁際に控えたお凧は、内心で横手を打った。芝居好きの主から聞いたことがあるような。歌舞伎の長唄三味線方などを務めている有名な弾き手だったはずだ。

杵屋宗家といえば、泣く子も黙る長唄三味線方の名跡だ。その宗家から別家を許されるほどであるから、初代勘十郎というお人はよほどの才の持ち主であつたに違いない。

なるほど、お春がどこか凧とした雰囲気おんきを漂ただよわせているのは、家族や自身が厳しい芸事の世界に身を置いているからだだろう。

「過分なお言葉恐れ入ります。本日はこちらを、どうしても天眼通の旦那さんにご覧いただきたくて参りました」

娘は膝の前に置いたそれに両手を伸べ、ほっそりとした指で風呂敷をそろそろと剥はがしていく。下にあつたものが露あらわになり、お凧は目を瞠みはった。

細長い木の棒に白い糸巻。それから、木の棒の上を走る黄色い弦と、四角い胴が見える。

——三味線だわ。

お凜は不思議な気分で三味線と娘を眺めた。綺麗な楽器だけれど、これがなんだというのだろうか。

お春は落ち着かぬ様子で時折障子の外を気にしている。まるで、誰かに追われているかのようだ。

「この三味線は『朝霧』と申します。兄の勘十郎に取り憑いて、命を奪おうとしている恐ろしい楽器です。兄の部屋からどうにか盗んで参りました。どうか、どうかお助けくださいまし」

お春の怯えに満ちた声に、お凜は耳をそばだてた。人に取り憑く三味線、そんなものがあるのだろうか。

「これは、この朝霧に相應しい腕前の弾き手にしか鳴らせない三味線なのだそうです。そうでない者が弾けば、やがて正気を失い命を奪われるのだとか。兄はろくに食事もせず、弟子の稽古も人に任せ、朝から晩までひたすらこれを弾いておりました。そして、命を吸い取られるかのように、みるみる痩せ細っていきまし……」

お凜は朝霧という三味線をしげしげ眺めた。黒に近い紫檀の棹と、象牙の糸巻に駒、白い皮を張った胴。

贅を尽くした装飾こそないが、簡素の美を凝縮したかのような、凜とした佇まいの楽

器である。——だが、それだけだ。

お凜に三味線の心得などないし、祖父が手慰みに爪弾くのを見たことがある程度だから、はきとはわからない。けれど、そんなおどろおどろしい、ましてや人を呪い殺す三味線にはとても見えなかった。

が、三味線に疑わしげな視線を向けるお凜とは反対に、仙之助は欣喜雀躍して声を弾ませる。

「朝霧。美しい名と姿ですねえ。私、これでも色んないわく因縁付きの品を蒐集しておりますが、三味線は初めてです。人に取り憑く恐ろしい楽器とは、ぞくぞくするじゃありませんか。まるでお春さんの美貌のように魅惑的だ……」

どさくさに紛れてお春を口説きはじめるので油断がならぬ。呪いの三味線を前にして、こみ上げる笑いを堪えきれない様子の仙之助を、はあ、とお春が怪訝そうに見ている。

「早速ですが、ちょっと弾いてみてもいいですか。私これでも三味線には自信があつてですね……」

仙之助が、つるりとした黒い瞳を輝かせ腰を浮かせる。

「いけません！」

「旦那様、やめてください！」

お春とお凧が悲鳴を上げた。

「なんだい、弾いてみなきゃ何が起こるかわからないじゃないか」

仙之助は不満げに言つて再び手を伸ばそうとする。しかし主の動きを見切つていたお凧が、一瞬早く三味線を奥へ押しやる。仙之助の手はすかっと宙を掴んだ。

「ぬぬっ」

齒噛みする仙之助とお凧が睨み合う。

「何かあったら旦那様はよくても周りの者が困ります。妙な真似はなさらないでくださいまし」

見境なしに怪異話に飛びついて、いわく因縁付きのがらくたを集めては、お凧を振り回して怪異の謎解きに付き合わせる主である。まあ、幾度か怪しい品々の謎を解き明かしてみせたこともあるにはあるのだが、火事に巻き込まれそうになったり、侍に斬られそうになったり、はたまた他人の長屋を解体して土間を掘り返し人骨を見つたり、とろくなことにならぬ。つい先ほどだって、あんな朽木をはいはい預かることになった。祟りだかなんだか知らないが、おかしな三味線に入れ込んで、今以上の奇行に走られたらかなわないのだ。

そもそも、呪いの三味線などお凧は信じていないけれど。

「せっかくの呪われた三味線なんだ。試さない手はないだろう。祟るんだぞ。取り憑くんだぞ。すごいだろ？ 生きててよかった！ って気分になるだろう」

そんな生き生きと瞳を輝かせながら言われても、と頭痛を覚えるお凧である。

突飛な主を持った苦勞をしみじみ噛み締めつつ、再び伸びてきた仙之助の手から三味線を遠ざける。目にも留まらぬ早業。うぬ、と伸びる仙之助の手。しかしお凧の見切りは完璧だ。電光石火、迅雷一閃、かるた名人も裸足で逃げ出す技の冴え。伊達にこの奇矯きようさわまる主に鍛えられていない。またもや畳を引っ掻いた仙之助が口惜しげに喚く。

「お凧！ お前、私をからかってないか!?」

「まさかそんな。滅相もございません」

目を半眼にして応じるお凧に、嘘をつけ、と主が叫んだ。

「じゃ、そろそろお気は済みましたか、旦那様。お客様のお話がいつまで経っても進みませんので、諦めてお静かにしていただけたら……」

「お前な、いつも思うけど主人の扱いがぞんざいだぞ？ 念のために言っておくが私は雇い主だからな？」

子供のようには悪態をつきながらも、仙之助はしぶしぶ手を引っ込める。それから、おはん、と咳払いし、お春に向き直った。

「で……どうして朝霧が勘十郎さんに取り憑いてしまったのでしょうか、お春さん」
 「は、はい」

主従の仁義なきやり取りを呆氣に取られて眺めていたお春が、ずっと表情を引き締める。

「それには、勘十郎兄さんがこの三味線を手に入れた経緯をお話ししなくてはなりません。私には二人の兄がおります。初代の父が三年前に亡くなり、一番上の兄が二十四で二代目を継ぎました。そして……ある日妙な三味線を持ち帰ったのです」

「妙な三味線」

鸚鵡返しに言った仙之助の視線が、二人の間に横たえられた三味線に向く。

「二月ほど前の葉月のことでした」

領いたお春が、ふるえを抑えきれぬ声で語り出した。

長兄・勘十郎は中村座で『妹背山婦女庭訓』の興行を終えた後、皆と門前仲町にある料理茶屋で痛飲して黒江町の家に戻ってきたという。その時、勘十郎は一挺の見慣れない三味線を手にしていた。

「そのまま、見たこともないような昂ぶった面持ちで部屋に籠もって出て参りません。どうやら持ち帰った三味線を弾いているらしいのですが、歪んだ奇妙な音ばかりが聞こ

えてきます。数日部屋から一歩も出てこないで、皆で心配して声をかけたものの、邪魔をするなど言うばかりで……」

一体どうしてしまったのか、とお春が必死に唐紙（紋や柄のある紙を貼った襖）越しに訴えると、兄はようやく姿を見せた。

「兄は、自分は天下の名器を手に入れたのだ、と申しました。鬼気迫るような、ぎらぎらとした瞳で……」

怯えが滲む娘の声に引き込まれ、お凜は固唾を呑む。

「ごく……当たり前の三味線に見えました。私は三味線など遊び程度にしか嗜んでおりませんが、そのくらいのことばかりです。それほど古いものでも新しいものでもなく、よい木と糸、それに駒なのが見て取れました。皮の良し悪しだけは見た目からはわかりませんけれど……でも、それだけでした」

眼前の三味線に恐ろしい目をお春の細い喉が、こくりと動く。

「しかし、兄はこの世のものとは思えない音色を耳にしたのだそうです」

風のない朧月夜だった。昼間の炎熱が地面の近くに重く淀んでいて、手足に纏わりつくように思われた。

提灯ちようちんを手にした勘十郎は、油堀川沿いの武家屋敷が並ぶ暗い道を千鳥足ちどりあしで歩いていた。夜通し賑わう仲町とは異なり、このあたりは灯りもまばらで闇が濃い。湿った感觸の闇の奥から、じりじりと呟く蟬せみの虚ろな声だけが聞こえてくる。時折雲が切れて朧おぼろな月明かりが漏れる他には、提灯の灯りだけが頼りだった。

不意に、薄紅い花卉が、ひらひらと儂はかなげに舞いながら目の前を通り過ぎた。

——桜か。

勘十郎は思わず足を止め、のっぺりとした闇に向かって提灯を掲げた。それから、まさか、と笑う。桜なぞとうに散った。蛾がか何かを見間違えたのだろうか。

少々酒が過ぎたかな、と思いつつ歩き出した時。

音曲が聞こえた。

九重このえに、咲けども花の八重桜、幾代の春を重ぬらん、
しかるに花の名高きは、まづ初花はつはなを急ぐなる、近衛殿の糸桜……

不意の三味線の音色と、冴え冴えとして乾いた唄声に、一瞬で酔いが醒めた。

足を掴まれたように棒立ちになる。心ノ臓の音が耳の奥でどんどん大きくなっていく。

三味線弾きの研ぎ澄まされた感覚が、この音色の尋常ならざることをびりびりと伝えてくる。

——なんだ。この糸の音は、なんなのだ。

見渡せば柳桜をこきまぜて、都は春の錦燦爛にしきさんらんたり、
千本の桜を植え置き、その色を所の名に見する、千本せんぽんの花盛り、
雲路うんろや雪に残るらん……

『西行桜』だ、と即座に気づく。

猿楽えんがく（能）の同名の作品から謡曲の一部を取った地歌で、京の東山と嵐山の桜を歌っている。猿楽の筋書きは、桜の精である老人が西行の夢に現れ、「夢の中の翁」を名乗り、舞いを披露するというものだ。

勘十郎の目の前に、薄紅色に霞む嵐山が優美な身を横たえ、白髪に美麗な着物を纏った桜の精が幽遠な舞いを踊っている。淡く香る花吹雪が雨のごとくに降りしきり、魂をも溶かすような音曲が近く遠く鳴り響く。

どれほどの間、そうして桜の幻影に心を奪われていただろうか。ふと我に返ると春の

嵐山も翁もかき消えている。雲が切れ、青白い月明かりがあたりを照らす。闇に目を凝らせば、ぬらぬらと黒い水を湛える堀の畔の大きな柳の陰に、三味線を手にして座り込む男の姿があった。

その時になってようやく、脳天を打ち割られるかのごとき衝撃が勘十郎を襲った。全身の毛穴が開き、冷や汗が流れる。視界が傾き、足が宙を踏むようにおぼつかぬ。

三味線を抱えたその男に、勘十郎はよろめきながら歩み寄っていった。

「……あ、あんた。今の三味線は……あんたが……」

掠れた声で必死に尋ねた。

——なんとという音色だ。

歓喜と絶望が入り混じった感情に、気が遠くなりそうだった。

——あの音色に比べたら、俺の音曲なんぞ雑音だ。まるで児戯のようなものじゃないか。羞恥のあまり、今すぐ掘割に身を投げてしまいたい衝動が胸を突き上げる。

三味線にあんな音が出せるとは。あんな音がこの世に存在するとは……

「あんたさんも、これに取り憑かれましたかい」

男がぼそりと言って、ゆっくりと振り返る。

提灯と月明かりにぼうつと浮かび上がった男の容貌に、勘十郎は危うく声を上げそ

うになった。土気色の肌と瘦けた頬。唇は乾いてひび割れ、濁った白目が薄黄色い焔のように見える。

男の顔に浮かんでいるのは、まさに死相だった。

「俺は、ここいらじゃあちつとは知られた鈴吉っていう三味線弾きでしてね。こいつは朝霧っていう名器なんですか。これに相応しい名手だけが鳴らせるっていう、この世にまたとねえ逸品だ」

「あ、朝霧？」

「そうよ」

男はぜえぜえと喉に絡んだような息をして、目を爛々と光らせる。

「これは名工石村近江の作といわれていてね。もとは盲目の旅芸人の愛器だったのさ。去年の春の夜、俺はまさにこの場所で、その旅芸人が朝霧を奏でているのを聞いたんだ。剃髪に、襷袢を纏った瘦せつぼちの男でさ。あちこち流れて深川に辿り着いたんだと言ったよ。だがその音色ときたら……この世のものとも思えねえ、天上の楽の音のようなもんだった」

恍惚とした表情の鈴吉が発した、天上の楽の音、という美しい言葉がひどく禍々しく響いた。

「なんとという名だ。その旅芸人の名は」

さぞ名のある弾き手なのか、と身を乗り出す勘十郎に、さあ、と男は首を横に振る。

「『桜の精』とでも呼べと笑ってたな。妙な男だった。だが、そんなことよりも朝霧だよ……俺はもう、あれに魅入られちゃってね」

音色に取り憑かれた鈴吉は、幾日も旅芸人のもとに通いつめ、朝霧を譲って欲しいと懇願した。けれど、どうしても聞き届けてもらえなかったという。

「朝霧に相應しい弾き手でなきゃ鳴らせない、諦めるって言うんだよ。無理に弾こうとすれば祟られて命を落とす。ある時には、鳴らせないことに絶望して掘割に身投げした者もいるってな。そりゃねえよ。あんな糸の音を聞かされたらよ、三味線弾きなら取り憑かれるに決まってるじゃないか。なあ？ あんたさんには、わかるよな。俺とあんたは似てるもんな」

馴れ馴れしく笑う鈴吉の掠れた声が、勘十郎の耳を不快に撫でる。似ているものかと反発を覚えるのに、朝霧の音色を思い返す度に、これを手に入れられるのなら何もかもを擲っていい、という衝動が込み上げるのを否定できない。

「俺はどうしてもこいつが欲しかった。だから、もらっただ」

三味線を抱き締めて無邪気に笑う男に、勘十郎は訝しんだ。

「もらったって、どうやって……？」

鈴吉は、仄暗い光を湛えた目を弓なりにして、囁いた。

「水に、突き落とされたのさ」

勘十郎の背筋にぞうつと寒気が走った。

「旅芸人ごときがこれに相應しくて、俺が相應しくないはずがない。そうだろう？ 河原者なんぞに音曲の良し悪しがわかってたまるか！ だから、それ、その水にさ……」

旅芸人の枯れ木みたいな両手から朝霧を奪い取り、目の前の掘割に突き落としたという。

あつ、と両手を宙に泳がせた旅芸人は、朧月を映す黒い水に落ちていった。

生々しい悲鳴と水音が聞こえた気がして、勘十郎は両の手で自分の二の腕を掴み身を竦める。

干からびた鈴吉の顔に、ひびのような皺が広がっていく。かかかか、という乾いて虚ろな笑い声が、骨の浮き出た喉の奥から沸き上がり、ぱくりと開いた唇からあふれ出す。

「その旅芸人は、もがきながら叫んでいたよ」

大きく目を見開き、鈴吉は哄笑と共に言った。

——浅ましや、鈴吉。わしの魂、命にも等しい三味線をよくも奪ったな。お前にそれ

が鳴らせるものか。たとえこの命が尽きようと、三界呪つてくれようぞ……！」

旅芸人は、そう叫びながら暗い水に消えたという。

耳障りな笑い声がふつりと途切れ、鈴吉は疲れたように背を丸めた。

その体が、急に一回り小さくなったように見えた。

「ここまで鳴らすのに一年以上もかかった。だがね、こんなもんじゃないんだよ。この三味線は、本当は、もつと……だが、ああ、残念だねえ。もう時がない。俺の手は、ぼろぼろだしよ……ここまで、か……」

ぼそぼそと語る鈴吉の顔が髑髏のように見えてきて、勘十郎は思わず後ずさる。鈴吉はいかにも口惜しそうに嘆息し、がくりと項垂れた。

そしてそれきり、動かなくなった。

ちやぶ、ちやぶ、と河岸を洗う水の音だけがかすかに耳に届く。

「——鈴吉さんよ」

勘十郎は、からからに干上がった喉から声を絞り出した。

蒸し暑い夜だというのに、冷たい微風がふつとうなじを撫でる。まるで誰かの冷たい手が触れたかのような感覚に、全身の毛が逆立った。

ふるえる勘十郎の手から提灯が落ち、音もなく燃え上がる。冷や汗に濡れた両手が勝

手に動く。はあ、はあ、とふいごのごとく呼吸しながら、己の両手が三味線の棹を掴むのを凝然と見つめる。

刹那、渾身の力で鈴吉の手からそれを奪い取っていた。

支えを失った男の体が、ぐしゃり、と土に頽れる。三味線に精気を吸い取られたかのように、その体は骨と皮ばかりに見えた。

かちかちと歯を鳴らし、死んだ男を見下ろしていた勘十郎は、くるりと踵を返すなり駆け出した。

——浅ましや。

しゃがれた、骨の髄まで凍えさせる声が、耳元で囁く。

勘十郎は歯を食い縛り、声から逃れようと闇の中を無我夢中で走り続けた。

そこまで語ったお春が、今にも泣き出しそうに顔を歪めた。

「そんな恐ろしいものをどうして盗んだのかと兄を詰りました。ですが、あの音色を奏するためなら魂でも売ると、兄は朝霧にのめり込んでしまいました。次第に稽古や演奏に身が入らなくなり、手や肩の具合がおかしいと漏らすのを耳にするようにもなりました。どんどん痩せていくので問い詰めたら、夜眠ると悪夢に悩まされると申します」

「悪夢、でございますか」

お凧が恐々尋ねると、はい、とお春が形のいい顎を引く。

「檻樓を纏った盲目の旅芸人が、三味線を返してくれ、あれと引き離されたら自分は生きてはいられない、手遅れになる前に返してくれ、と水の中から両手を伸ばし、兄の袖を引くのだそうです……」

黒い水から突き出た枯れ枝のような両手を見た気がして、お凧は背筋がうそ寒くなる。

「兄のことが案じられてならなくて、こっそりご祈祷やお祓いをお願いしたりしましたけれど、ちっとも効いた様子がなくて。下の兄にも相談しましたが、まともに取り合ってくれませんでした。それで今朝、隙を見て朝霧を盗み出し、そのまま旦那さんのお屋敷に駆け込んだんです。天眼通の旦那さんのお噂は、以前耳にしたことがございましたので」

途中、掘割にでも捨ててしまおうという考えが頭をかすめたが、三味線弾きの家に生まれて三味線を粗略に扱うなんて罰当たりなことではできなかった、とお春が締め括った。お凧は思わず深く息を吐いた。なんという悍ましい話だろうか。清楚な佇まいの三味線がひどく稠々しく見えてくる。だが、仙之助は少々童顔の顔を綻ばせ、ふうん、と双眸を楽しそうに光らせている。つくづくわからぬ主だ。

「そういうえは、下の兄上という……」

仙之助が、つと小首を傾げた。

「確か、糸之丞さんとおっしゃる方ですよ？ 勘十郎さんよりも腕がいいと言われていた……稀代の名手になるに違いないって評判だった覚えがあるんですが」

「——ええ、おっしゃるとおりです」

お春の表情が翳る。

「糸之丞兄さんは、そりゃあ才がありました。子供の私が聞いても惚れ惚れとするような、神がかった腕前でしたもの。勘十郎兄さんではなく糸之丞兄さんを跡継ぎに、という声もあったほどで。けれど驕らない、とてもやさしい真面目な人で」

兄妹三人仲がよかったんです、と痛みを堪えるように言う。

「『よかった』とおっしゃると、今は違うんですか」

ずばりと尋ねる仙之助に、娘の肩が悄然と下がった。

「はい。糸之丞兄さんは、三味線を捨ててしまいました。父が亡くなる少し前から悪所を遊び歩くようになり、稽古にも身が入らなくなつて……兄が二代目勘十郎を継ぐ頃には家を飛び出してしまったんです」

「そいつはまた、どうして。もったいない話だ」

演奏を聞いてみたいのになあ、と仙之助は実に口惜しげだ。

「才があるのに跡を継げないことが、納得いかなかったんだと思います。ここ数年は、家人の誰にも心を閉ざしていました。勘十郎兄さんは糸之丞兄さんの行状が我慢ならないうで、顔を合わせては喧嘩ばかり。殴り合いの騒ぎになることもございました。家を出た糸之丞兄さんは、蛤町の長屋に暮らしています」

お春がうつすらと涙を溜めた目を瞬かせる。

「母はとうに亡くなっております。父も失い、この上きようだいがばらばらになってしまふなんて、耐えられません。勘十郎兄さんにどうしても正気を取り戻して欲しいのです。旦那さんより他にお頼りできる方がおりません。お願い申し上げます。どうか、この呪わしい三味線を預かっていただけませんか。このとおりです」

そう言って畳に両手をつくると、必死の面持ちで頭を下げる。

「そういうことならお安い御用です。この仙之助にお任せいただけたら、悪いことなど起きやしません。それにしても、なんとお兄さん思いの、愛情深くおやさしいお方なのでしよう。私、感動で胸の詰まる思いがします」

仙之助はほんのり頬なぞ染めて、切なげに胸を押さえてみせる。

「きつと、人知れず思い悩んでおられることがまだまだおありでしょうね。私も見ての

とおりの繊細な男ですからね、よくわかりますとも。どうか私めに心の内を打ち明けてはくささいませんか、お春さん。ああ、あなたのその涙を拭って差し上げたい。なんなら私も一緒に泣いて差し上げたい……！ というわけでどうでしょう、紅葉狩りなんて一緒に」

悪い虫が騒ぎ出したようだ。怪異と同じく美女にも目のない主である。仙之助は熱っぽく視線と口調で身を乗り出そうとする。

「ですが」

とお凛はすかさず遮った。

「勘十郎さんはお嬢さんにお怒りじゃありませんか？ 三味線を返せとおっしゃるのでは……」

「兄には、朝霧は掘割に捨てたと申します。それで兄が元に戻るのなら、恨まれても構いません」

楚々とした顔に瞳を強く輝かせ、お春が言う。

「ですから、どうか、どうかお願い申し上げます」

娘が両手について再び深く頭を下げる。障子の外に雁が音が遠く響いた。

「弾き手を狂わせる三味線か。いいねえ、旅芸人の恨みの声が聞こえてくるようじゃないか」

お春が去った居間で、仙之助が手にした朝霧に頬ずりせんばかりの様子で言う。

「そんな三味線、聞いたことがありません。ただの粗悪な三味線なのかもしれませんよ」
崇りも呪いも信じないお凧の冷めた言葉に、仙之助はきつと秀眉を吊り上げる。

「何を言うか。二代目勘十郎が取り憑かれるほどの品なんだぞ。真正銘呪いの三味線に決まってる。——だがお凧、今回はすんなり三味線を預かったじゃないか。毎度がらくたを増やすなって言うくせに」

「それはその、人面樹はともかく、三味線程度のことであればさして面倒はありませんし。それに……」

お凧は淹れ直した茶を出しつつ、お春の切羽詰まった顔を思い浮かべた。

「私にも兄や姉、弟がおりますから。きょうだいでいがみ合うなんてどんなに悲しいことか。お春お嬢さんのお気持ちはお察しして余りあります」

お凧の実家である深川大和町の蕎麦屋『かやの』は俵しい小さな店だけれど、きょうだい四人仲がいい。敵意を向け合って暮らすだなんて、想像するだに胸が張り裂けそう

だ。なんとかお春の力になりたいものだと思うのである。

仙之助が珍しく神妙な顔で嘆息する。

「わかるなあ、その気持ち。私もさ、あんな口うるさい兄さんだけど結構尊敬してるし、兄さんがいるお陰で私は好き勝手していられるんだから感謝しているんだよ。たまには兄さんの肩でも揉みに行こうかねえ。でも顔を合わせると、芝居通いと芸者遊びはいい加減にしろだとか、がらくたを集めてのらりくらりと遊び暮らすんじゃないとか、着物や小間物に金子をつぎ込むとか、お説教がはじまるんだよ。肩揉みはやめとこうかな。やつぱり顔を見るのは盆暮れ正月だけでいいや。……いや私は兄さんをとっても愛しているんだよ？」

仙之助の兄・利一は柳亭の跡継ぎで、それはそれは男ぶりがよく、万事に秀でた若旦那だ。次男坊については諦めの境地の父や母とは異なり、不肖の弟を更生させようと涙ぐましい努力をしている。だが肝心の弟はこのとおりときているのだから、まったくお勞いこと、とお凧の胸は痛むのである。

「それにしても旦那様。勘十郎さんはこれで正気に戻られるんでしょうか」

「……さあ。芸の道は業の道。果てしがないもんさ。天下の名器に惑わされてそう簡単に諦めがつくものかねえ」

遠い目で言うてから、仙之助は三味線を陶然と見つめる。

「かくいう私も、こいつの音色を聞いてみたいもんだけどね。骨の髄まで虜にされてみたいじゃないか。だが怖い女中が私に弾くなと言うし」

そう言うて、ちらりとお凜に意味ありげな視線を送ってくる。

そらおいでなすつた、とお凜は嘆息した。

「私に弾いてみるとおっしやるんですね」

「大丈夫だって。祟りも呪いもお前を避けて通るんだからさ。何も起こりやしないよ」

満面の笑みを浮かべ、仙之助は朝霧をお凜の前に押しやった。

どういうわけか、仙之助はお凜が祟りや呪いを寄せ付けない体質だと信じ込んでいるのだ。お陰で女中としては恵まれた待遇で屋敷に雇われたはいいが、主の妙ちきりんな趣味事に付き合わされる羽目になる。しまいには、こうして呪いの三味線を弾いてみると言いつけられるわけだ。いくらなんでも、二人も命を落としたいわく付きの三味線を弾くなんてぞつとしない。怪異なぞ信じていないお凜ではあるが、やはりいい気分はしないものだ。

「私、三味線なんて習ったことはありません。下手ですよ？ どう考えても相應しい弾き手じゃございません」

顔をしかめて渋るものの、主は黒目がちな両目を輝かせて力説する。

「そんなこた構いやしない。少しでいいから、どんな音色なのか聞いてみたいんだよ。もしかしたらお前には隠れた音曲の才があつて、この世のものとも思えない美しい音色を奏でるかもしれないぜ」

いい加減な励ましもあったものだ。調弦はおろか勘所も何もわからないというのに。それに、万が一よからぬことが起きて呪われたらどうするのだ。

なおも渋っているお凜に、仙之助が片膝を立てて力強く言った。

「わかった。来月の中村座の顔見世にはお前も連れていつてやるからさ。どうだ！」

「顔見世……團十郎……？」

お凜はかっと目を見開く。

「そうとも。團十郎、團十郎。『暫』見たいだろ？」

「見たいに決まってるじゃありませんか。撥はどこですか。何をまたもたなさってるんです？」

俄然やる気を出して、主の手から撥を奪い取った。

来月は歌舞伎の顔見世興行があり、三座でそれぞれ次の一年間の演目や役者のお披露目をする。これは「芝居正月」などと称され、さながら正月のごとき盛り上がりを見せ

るのだ。

同じ島田町内に、歌舞伎役者・七代市川團十郎の邸宅があつて、ご近所同士というところから團十郎と仙之助には行き来がある。大人気の顔見世の席も、團十郎の厚意で仙之助はいい席を確保できるのだった。江戸で絶大な人気を誇る團十郎は、芝居狂いの仙之助はもちろんのこと、お凜だつて熱烈に慕^{ひいき}っている。その團十郎が登場する顔見世に連れていってもらえるなんて、そうそうあることではない。祟^{たた}りや呪いの一つや二つ、いや百でも二百でも薙^なぎ払^はつて捻^{ひね}り潰^{つぶ}してくれよう。一騎打ちに挑^{もく}む巴^と御^ご前^{ぜん}のごとく、お凜は薙^なぎ刀^やならぬ三味線をはつしと掴^{つか}んだ。

「行きますよ」

きりりと表情を引き締め、左手で棹^{さお}を支え、右手で撥^{ばち}を構える。そして、えい、という裂帛^{れっぱく}の気合と共に、撥^{ばち}を一の糸に打ち付けた。

どよおん。

耳が歪^{ゆが}んだかと思うような、奇つ怪な音が轟^{とどろ}いた。

「あれ？」

「ん？」

お凜と仙之助は同時に声を上げた。なんだ今の音は。三味線とはこんな風に鳴るもの

だったか。いや、何かの間違いではあるまいか。

「ええと、こうでしょうか。テテテン……なんて」

気を取り直して糸をかき鳴らす。途端、濁流のごとき悪音が迸^{はな}り出て、ぎゃあ、と仙之助が悲鳴を上げた。

「やめろ！ こりゃあひどい。なんつうひどい音だ！」

失敬な、とお凜は焦りつつ主を睨^{にら}んだ。いくら心得がないとはいえ、ここまでひどく言われるなんて心外だ。断然手に熱が籠^こもる。

「これは小手調べってものです。まだ本気を出していませんから！ ええと、チントンシヤンのテントンシヤン……」

「耳がもげる！ 呪いか？ こういう呪いなのか？」

「待ってください、思い出してきました。うちの爺ちゃんが弾いてました。それ、チリチリレンのジャンジャンジャン。なんだか乗ってきました、私。團十郎のためなら、それ！」

隠れていた才が目覚めたのであろうか、と鼻息荒くかき鳴らすお凜の前で、助けてえ、と仙之助が虫の息で長火鉢に縋^{すが}りつく。障子の外では、庭木に群れていた鳥が恐慌を来^{きた}したように空へと逃げ出す気配がする。

「旦那様、なんですかこの恐ろしい音！」

「天変地異の前触れじゃございせんか。それとも雷様が怒り狂っていなさるのかも」
女中のお江津と下男の富蔵が、周章狼狽して居間に飛び込んできた。

「皆してあんまりじゃありませんか」

お凜はすっかり興を削がれて撥を止めた。

「こいつは確かに恐ろしい三味線だ……掘割に身投げしたくなる気持ちもわかるぜ……」
仙之助が地獄を見てきたかのような形相で呻く。

「名手の勘十郎さんでも鳴らせなかったんでしょう？ やっぱり、ただの質の悪い三味線なんじゃありませんか？」

「ただの、だと？ この世の終わりみたいな桐々しい音を聞いただろう！ お前の腕がひどいのを差し引いても、こいつはただの三味線じゃあない。どう考えても呪われてるに決まってる」

ぜえぜえ喘ぎながら言い放つと、仙之助は襟の乱れを正し、座り直した。

「なんにせよ、いいものを手に入れたよ、私は。呪いの三味線だなんて最高だ。朝霧や、私のもとに來たからにはもう安心だよ。私はお前をうんと大事にするからね——だがお凜、くれぐれも二度と弾いてくれるなよ。お前が全力で弾いたら深川どころかお江戸が

滅びそうだ」

呪われた三味線を抱き締めながら、お凜に恐怖の色を浮かべた目を向けて言うのだから失礼な話である。

また旦那様の酔狂がはじまったか、と奉公人が頭を振り振り去っていく。鳥たちが恐々戻ってきて、再び庭で囀り出すのが聞こえる。

「それにしてもだ。こいつを見事にかき鳴らす人がいるんだとしたら……そいつはちよいと、お目にかかってみたいもんだねえ。そうは思わないか、お凜」

脇息にもたれた仙之助は、手元の三味線に夢見るような眼差しを注ぐ。

朝霧は、つい今しがた恐るべき騒音を放ったことなどなかった風に、優美な体を畳に横たえ沈黙していた。

(二)

「ああ、えらい目にあつた。まったく散々だった！」

村時雨の中、そう嘆きつつ仙之助が屋敷に戻ったのは、お春の来訪から数日後の夕暮

れ時のことだった。

「どうなさったんですか、旦那様。染吉さんと梅奴さんにととうと振られたんですか？」

お凜が湿った黒羽二重の羽織を受け取りつつ気の毒そうに尋ねると、

「とうとうとはなんだ、とうとうとは！　さらっと縁起でもないことを言うな」

と、茶の間の座布団に腰を下ろした主が青くなる。

今日は鼯鼠の辰巳芸者である染吉と梅奴を連れて、河原崎座で歌舞伎の千穂楽を楽しんできたはずだった。常ならば上機嫌の鼻歌まじりで帰宅するというのは、今日はどうしたことだろうか。

「二代目勘十郎だよ。あのお人が代役で弾いてるところがあったんだ」

「勘十郎……ああ、お春お嬢さんの兄上様ですか。三味線に呪われたっていう」

お春の悲しげな顔を思い出し、お凜ははっとした。

杵屋勘十郎は中村座の座付きだが、様々な理由から座の間で人を融通することは珍しくない。そういうわけで勘十郎が三味線方に入っていたらしいのだが……

「どうも耳障りな三味線がいるのに気づいてさ。調べたら二代目勘十郎だっていうじゃないか。手が呪われたとでもいうのかねえ、身は入っていないし、暴れ馬みたいな調子でひどいもんだったよ。素人はともかく、耳の肥えた客には聞けたもんじゃない。染も

梅も耳がいいからかんかんになっちゃまって……」

売れっ子の辰巳芸者だけあって、二人とも三味線の腕前は音に聞こえたものだ。殊に染吉は腕もいいが気位も高い。その上、生前の初代勘十郎の知己であったそうで、

「なんだい、あれが二代目勘十郎だって？　へそが茶を沸かすよ。あんな伸びた蕎麦みたいな悪音を恥ずかしげもなく客に振る舞うつてのは、一体どういう見なんだ。お父上の演奏はそりゃあ鮮やかで色気のある見事なもんだった。勘十郎の看板を張る腕がないんだつらとつと弟に譲っちゃまいな。お父上が草葉の陰で泣いていなさるよ。芸に命を懸けてる人間としちゃ我慢ならないね」

などと楽屋に詰めかけて談判しようとする始末。激怒した門弟たちと一触即発の事態であつたそう。

「結局、勘十郎さんは加減が悪くなったとかで途中で引き揚げちゃったけど。だが二人ともすっかり機嫌が悪くなっちゃまうし。千穂楽が台無しだ」

洒落た銀の煙管を手にした仙之助は、憂鬱そうに刻み煙草を雁首の火皿に詰める。それを火入れの炭に近づけ、ぱっぱっと吸うや、火皿から細く煙が立ち上る。たちまち茶の間に甘く芳しい香りが漂い出した。最高級の「国分葉」という煙草で、味も香りも絶品なのだそう。だが脇息に頬杖をついた仙之助は、吸い口を唇の端に挟んで恨めしげ

に宙を睨む。

「私らだけじゃないよ。周りのお客もひそひそ話してたぜ。二代目はどうしたんだ、最近めっきり腕が落ちたんじゃないか、いや弟の方が元から上手かった、ってね。朝霧のせいなのか、元々才がなかったのか、どちらだろうねえ」

「ひどい……」

そんな悪評が耳に入ったら、勘十郎はもちろん、お春がどれほど心を痛めることだろうか。いや、すでに耳に届いているのではなからうか。お春が涙ぐむ姿が目につかび、あたたかな部屋にいるというのに寒々とした心地になる。

「口直しに仲町で一杯飲んでたら團十郎さんと行き合ってたさ。團十郎さんも、近頃の勘十郎さんの演奏はいけないうって渋い顔してたなあ。顔見世番付には今のところ名があるらしいけどね。下手したら役を降ろされるかもしれないって言ってたよ。しかし、このままだと、また目も当てられないことになるだろうな。染と梅も一緒に見に行くつもりだったのにどうしてくれる」

忌々しげに仙之助が吸い口を噛む。

「だ、旦那様。どうにかならないでしょうか？ 勘十郎さん、朝霧に祟られてるんですよ。呪いを解くとか祓うとか、何かできないんですか」

「お前、祟りも呪いも信じてないんじゃないか」

お凜は思わず言葉に詰まる。

—— だけどこれじゃあ、お春お嬢さんも兄上様たちもあまりにもお気の毒じゃない。顔見世の半月ほど前には「顔見世番付」とか「新役者付」と呼ばれる一覧が刷られ、人々がそれを求めて殺到する。この紙には役者はもちろん囃子方の名も連記される。名前が記されていない、あるいは名はあるのに興行から外された、などということになれば、勘十郎の名は地に落ちるだろう。勘十郎のみならず家族や門人にとって、考えうる最悪の事態だ。

おもむろに立ち上がった仙之助は、壁に掛けてある朝霧を両手に取って、あたかも恋人を見つめるようにして問いかける。

「朝霧。お前さんもつれないねえ。私みたいな男前を差し置いて、勘十郎さんにご執心とは妬けるじゃないか。私を虜にしておくれよ。それとも、勘十郎さんを取り殺すまで満足しないのかね？」

「旦那様、三味線よりも勘十郎さんのことですよ」

三味線に向かって嫉妬まじりの恨み言を紡ぐ主の横で訴えるも、仙之助はふんとはかりに鼻を鳴らす。

「いくら朝霧に魅入られちゃったといったって、死んだ鈴吉さんから朝霧を盗むようなお人だぜ。はっきり言って自業自得さ。助けてやる甲斐なんてあるのかねえ」

「そんな言い方、ひどいじゃありませんか！ お春お嬢さんが悲しまれます。この仙之助にお任せいただけたら、悪いことなぞ起きやしません、なんておっしゃったくせに。お嬢さんにがっかりされてもいいんですね？ どこが天眼通の目なの、魚の目か木の節穴の方がまだましよ！ なんて言われてもいいんですね？」

うっ、と美女に弱い主が怯む。

「それから小座敷に置いたあの人面樹。そのうち茸が生えるようなことになってもいいんですね……？ いつの間にか庭に転がって、雨に打たれているかもしれないよ？」

「な、何？ 人面樹まで人質に取るとは卑怯な」

怪異にも弱い主が、ぐぬぬ、と朝霧を抱く手に力を込める。

「——まあ、染がまた悶着を起こして、中村座に出入り禁止になったら困るしなあ。しかしどうして私がそんな男を……だがお春さんのためか……」

「そうですとも。男を上げる好機ですよ、旦那様！」

「これ以上いい男にならなくてもいいんだけどなあ」

なあ、朝霧や、などとまるで緊張感に欠ける様子の主に、地団太を踏むお凜だった。

雨音にまじって慌ただしい足音を廊下に聞いたのは、それから一刻（約二時間）ほど経った頃のことだった。

「旦那様。お客様がおいでなんですが……」

「お客？ こんな時分に、一体誰だい」

障子が開き、膝をついたお江津が顔をのぞかせる。その背後には、灰色に煙る暗い庭が陰鬱な雨を透かしてぼんやり見えた。お江津はふっくらした頬を強張らせ、目尻の少し下がった目を泳がせていた。

「へえ、それが……あ、あの」

背後を振り返り、お待ちくださいまし、とうろたえる。秀眉を寄せた仙之助が、隣室の唐紙を開けて朝霧を押しやり隠す間に、どたどたと荒々しい足音が近づいた。

「天眼通の旦那とかいうのは、あんたかい」

儼しい格子縞の長着に懐手にした男が、縁側に現れるなり敷から棒に言った。まだ二十そこそこというところか。傘も差さずにやってきたのか濡れ鼠で、えらく荒んだ風体だ。苦み走った細面に、上背のある体つきをしているが、雨に濡れそぼった髪はほつれ、

顎には無精髭、顔色も冴えず、切れ長の目にはお凜が怯むような剣呑な光があった。

「左様ですが、兄さんはどなたで？」

仙之助はのんびりと長火鉢に白い手をかざして応じる。

「名乗るほどのもんじゃねえさ」

「いや、名乗ってくださいよ」

男はぐいと唇の端を歪めて笑い、ずかずか部屋に踏み込んできた。

「実はあんたに、折り入って相談事があるんだがね」

折り入って相談するにしていはいぶんな態度で仙之助を見下ろす。

「はあ、なんでしょう」

「あんたのところに、近頃若い娘が三味線を一挺持ち込まなかったかい？ あれを譲ってくんねえかな」

お江津と一緒に身を縮めていたお凜は、どきりとして耳をそばだてた。朝霧のことだろうか。

「若い娘さんに、三味線ねえ。はて、どうだったかなあ。私の常磐津のお師匠さんのことかな。そりやもう小股の切れ上がった別嬪でしてね。歌声ときたら絶品で……」

「そんなんじゃないやねえ。お春って娘が来ただろう。その娘が預けた朝霧って名の三味線だ

よ。金なら少しはある。真つ当な金だぜ」

のらりくらりとした仙之助を遮って、男は懐から掴み出したものをぽんと放る。仙之助の膝の前で、ぺしやり、と寂しい音を立てたのは、年季の入った藍の中着袋だ。仙之助が品のいい顔をしかめた。

「ほんとに少しですねえ。お生憎様、この仙之助、金子なんぞで動かされ……ないこともないけど、この程度じゃお話になりませんよ。箱に入れてきてもらえませんか、箱に。

山吹色の菓子がお好物なんです、私」

悪徳役人みたいなことをのたまうて、白い指で摘んだ巾着袋をこれ見よがしに顔の前で振ってみせるものだから、男は激怒した。そりやそうだ。

「この野郎。人が下手にやりやあつて……」

吼える男の顔に血が上る。男がいかにも喧嘩馴れた様子で拳を振り上げ、きやあつ、とお凜とお江津が悲鳴を上げた時――

「人にものを頼むにしちゃあ、あんまりな態度じゃありませんか。ねえ、糸之丞さん」

耳に通る声が喧騒を払った。しん、と茶の間が静まり返る。表のひそやかな糸雨の音を聞きながら、お凜は啞然とした。

「糸之丞さんって、お春お嬢さんの、兄上様の……？」

男は唇を引き結び、仙之助を睨みつけている。一言も発しない様子がいかにも不気味だ。仙之助は銀無垢の煙管を唇の端に咥え、おっとり微笑んだ。

「昔、中村座の舞台でお見かけしましたよ。いやあ、素晴らしい糸の音で惚れ惚れしましたっけ。それがまあ、三味線をやめてしまわれたんですって？ 私、本当に残念で残念で」

国分葉の香り高い煙をふうっと吐いて、ゆるゆると頭を振ってみせる。

「……そんな昔の話は忘れた」

ようやく男がぼそりと言った。

「そうですね。にしては今更三味線が欲しいだなんて、どういう風の吹き回しなんでしょうね。押し込み強盗に鞍替えでもなすったんですか？」

「あなたの知ったこっちゃねえ」

「そいつはご挨拶。じゃあ、私もあなたの頼みを聞く筋合いじゃないですよねえ」

はらはらするお凜をよそに、仙之助は白い顔に清々しい笑みを浮かべる。鈍いのか能天気なのか図太いのかわからぬまだ。たぶん全部なのであろう。

糸之丞は焦れたように頬をびくびくさせる。

「ぐだぐだうるせえな。御託はいいから三味線をくれと言ってるんだ」

「嫌ですよ。大体、あれは選ばれた名手にしか鳴らせないっていうじゃありませんか。あなたに弾けるんですか？」

「弾いてみなさやわからねえ。だから寄越せ」

糸之丞の双眸が鈍く光る。

「二代目勘十郎よりも腕がいいって証が欲しいわけですか？ まあ、今夜もひどいものでしたからね。やっぱりあなたを二代目に、って話してるお客も多かったですよ。團十郎さんもそんなことをおっしゃってたし」

喜ぶかと思いきや、糸之丞は薄い唇をぎりりと噛んで黙り込む。よほど兄への恨みが深いのだらうか、とお凜は内心暗澹とした心地になった。

仙之助は目ばかりぎらぎらさせて動かぬ糸之丞に辟易した様子で、やがて根負けしたように嘆息した。

「しよがないなあ……そうだ、じゃあこうしましょう。ここでちいっと演奏してみちゃくれませんか。それで私が降参するくらい素晴らしいものを聞かせてくださったら、考えてもいい」

「なんだと？ てめえ、一体何様のつもりで……」

糸之丞は一瞬呆気にとられ、それから茹で蛸みたいに顔を赤く染める。

ちよつと待つてくださいよ、と部屋を出た仙之助が、うきうきとした足取りで三味線を一挺抱えて戻ってくる。

「はいどうぞ。私の愛用の三味線です。『菊岡』で作った最高級品なんです。撥は象牙？ それとも鼈甲ですか。ささ、ご遠慮なさらず」

「勝手に話を進めるな。やるなんて一言も……」

仙之助は、まあまあまあ、とにこにこしながら男の手に三味線を押し付ける。

「私は音曲を愛する遊び人ですからね。オのあるお人に無下な真似はいけません。ええと……じゃあ『供奴』をお願いしましょうか。今年の曲ですけど、弾けます？」

「な、何？」

ぽかんとする男に構わず茶の間の真ん中に立ち、開いた扇子を左手に持つて、くるくる回って見得を切るなり――

「してこーいーなア」

やたらといひ声で掛け声を発する。

「……そら、三味線！」

あんぐり口を開いている糸之丞を急かす。糸之丞は、あ、え、と何がなんだかわからぬ様子でふらふら座り、無意識のように糸巻を触って調弦をはじめ。そして仙之助が

目頭で合図するや、引きずられるように撥を翻した。

やっちゃって来い今夜の御供　ちつと後れて出かけたが
足の早いに　我が折れ田圃は近道　見はぐるまいぞよ　合点だ……

仙之助が歌いながらしなやかに両手を踊らせ、きびきびと足拍子を刻む。切れよく艶のある三味線が軽快に鳴り響き、茶の間が芝居小屋に変わったかと錯覚するほど明るく華やいで感じられる。

近頃人気の歌舞伎舞踊、供奴である。

吉原通いの主人の供をしてきた奴――奉公人が、主人とはぐれてさあ大変、と鯨背で滑稽な踊りを披露する。腰巻丹前に鎌ひげという跳ね上がった髭、深い月代に膨らんだ鬘の奴頭、手には箱提灯という出で立ちで、「仕て来いな」という掛け声からはじまる踊りは、この春先に二代目中村芝翫が中村座で初演したところ大当たり。今やお座敷芸として大流行している。仙之助はもちろん飛びついて、辰巳芸者の染吉と梅奴に披露するのだ、と稽古に励んで今や玄人はだしの腕前である。

……なんてことはともかく。一体何が起きているのであろうか。お凧とお江津、それ